

アジスト紀

北爪満喜

きたつめまき

北爪満喜
きたつめまき



アメジスト紀

著者 北爪満喜

発行者 小田久郎

発行所 株式会社思潮社

〒一六二 東京都新宿区市谷砂土原町三一十五

電話 (三三六七) 八一五三(営業)・八一四一(編集)・八一四二(FAX)

振替東京八―八一二一

印刷所 相良整版・福田印刷

製本所 岩佐製本

発行日 一九九一年五月一日

ISBN4-7837-0347-7 C0092

アメジスト紀
北爪満喜

装帧
芦泽泰伟

目次

1、キリエ

単独なメロ

10

キリエ

16

鏡だけはしらんぷりした

26

秋のプール

32

しなやかに街は呼吸して

36

なわとび

46

2、幻鏡

ガラスの野へ

58

ガラスの野(Ⅱ) 64

紺色の柶 70

スピリット 76

シリウス
天狼星の時 82

幻鏡 90

C A C T U S 98

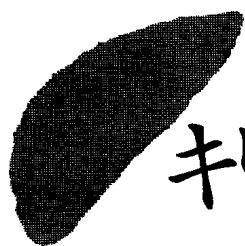
3、スクリーンのようにねじれ換気している肖像

白色光 106

オパレツサン光る 110

スクリーンのようにねじれ換気している肖像 116

アメジスト紀



判工

単独なメロ

シートには

うっ血した夢の手足をたばねて結び

ひそかにすてさり

ためいきをつく

あめのあさ

ばら色の花がくつがえるよう　ぼくは秘密の目蓋をひらく

砂を潜った涙をそえて

やわらかな二枚貝の見る（　彼女は至福の輝きの繭）

たえきれないぼくが変換する　それ

かなしいといわずにそだてた真珠

虚空のうてなにゆらめきつづけるまばゆい結晶体なんだ
しかし ぼくはベッドを通過し

深海にでる

つなを切る 闇のうねりになげうちまかせ

微笑んでみる

(かえせはしない)

(ゆめにくるまれもどりはしない)

ひどく青を飲んでしまった

服や日付がばらばら落ちる

ひび割れが 床を走り去る

部屋には椅子もなにもなくなり

ひと番の眼球だけが つるりとにじみ浮きあがる

(すべりおちてもいいか ドラセナ)

ペランダの鉢に聞いている ぼく

そう ぼくは眼球なんだ

ぼく以外には合いカギのない
鈍色に塗りこめられてゆく
じりじりと犯されてゆく

つめたい真珠に みつめられ
ふたたびぼくへと くべられる
この幽閉

レンズが 割れてしまうでは

ピンボールの遊びでもはじめなきや

絶間なく 移ってゆけるため

屈折へ請われる遮るピンや仕切りのゆくへはどうするの？
だけどまったく困らないんだ

「昨日」の裾から写真は焦げて黒く固まり

右端 強く叩きだされては 暗がりへ ほらまた

うちあたる (くぼんでよどむ斜めの天井)

うなるスケジュールの誹謗をかぶって花瓶のばらがブリキにな
った昨日を忘れてゆけそうにない

鈍い軌跡が 振出しへゆく バーにうちつけられるたび

まるで 胸中に記憶する 止まったままの扇風機?

モノクロの スチールの ずれ落ちずれ落ち旋回している奇異
な映像を抱きとめている

ゆらめきさえもそなわって

なんなく はじきかえしてくれるたら

ピンボール

鋼鉄のポップコーン序曲を挿入したくなる

フライパン に耳をよせてよ

ほら 多角な転調が ぼくの曲線をアレンジしてゆく

はしゃいで

器官のうらがわまで

ひとつとびする 回転にも耐え

うちつけられてゆくぼくの

ひびきがこんなに 螢光している

潜在するサクレッツ音を 見張って閉じているドアの色 か

あざが 浮上ってくる

「ひらかない唇のかたち」のドアを

くぐっても くぐっても辿りつけない

ふりつもる塵の部屋べやを

ぼくが 足跡をつけてゆく

あさい沼をならべるように 青いぼくの歩幅の

沼が

冷たく 塵を踏んでゆく